

國學院大學學術情報リポジトリ

こんなに嬉しそうな顔をみたことがあるだろうか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 良彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001216

こんなに嬉しそうな顔を見たことがあるだろうか

近藤 良彦

たつおくんが少年野球のチームに入ってきたのは彼が2年生のときであった。3年生の息子も同じ時期に入部して、私はそのチームのコーチをしていた。といっても野球の経験は全くない“お父さんコーチ”である。そんな私から見ても、たつおくんには他の低学年の子どもたちに見られない野球のうまさがあった。このくらいの子どもたちはボールを怖がることが多いが、彼はボールを後ろにそらさないように全身でボールを取りに行こうとしていた。打撃でもバットを振り易いように短く持ち、ボールから目をそらさないでしっかり当てていた。

たつおくんには負けん気の強さもあった。上級生と一緒に練習しても物怖じすることがなく、「ちゃんと投げろよ」などと言ったりする。一方で、ときどきコーチに抱きついてきたりする人懐っこさもあった。私が水筒に梅酢を水で薄めて持ってくると、まるで幼児がおねだりをするかのように飲ませてと近づいてきて、味を確かめるように飲むのが何ともかわいらしい。そんな彼と一年間野球をした後、私は留学のため一年間チームを留守にした。

一年後再びチームを訪れると、4年生のたつおくんは5年生を中心とするチームでレギュラー選手としてショートを守っていた。4年生にしては小柄ではあるが、守備はとても上手で5年生のレギュラー選手にも負けていなかった。私は息子とともに再びチームに入り、コーチをすることになった。コーチといっても相変わらずのど素人なので、球拾い専門と言った方が的を射ている。「たつお、大丈夫か？」と、コーチの声が聞こえてくる。

「大丈夫！」と、たつおくんの気丈な声が聞こえてくる。

「これは、大丈夫ちゃうで。試合に出られへんかもしれんで。」

「審判が認めんとちゃうか。」と、別なコーチの声も聞こえてきた。

たつおくんの足元を見ると、スパイク靴から三本の指が見えている。使い込んだそのスパイク靴はもう限界を超えていた。もう一方の靴を見てもやはり大きな穴が開いていた。前の試合では、他の子の大きめの靴を借りて、それに詰め物をして出場していたそうである。スパイク靴を何とかしなければという話になった。

息子が3年生の時に使っていたスパイク靴が家にあると言いだした。たつおくんに足の大きさを聞くと21cmだそうである。早速家に戻って確かめてみると21.5cmであった。一年間使ったものなので、糸がほつれたりしていてそれなりのものであったが、穴は開いていなかった。

グラウンドに戻って、たつおくんに靴の入った箱を渡すと、彼は照れくさそうにそれを開け始めた。出てきた靴を見たそのとき、まるで地面からゆっくり水が湧き出してくるかのように、顔がほころんできた。

こんなに嬉しそうな顔を見たことがあるだろうか

「こんなに嬉しそうな顔を見たことがあるだろうか。」その時私はそう思った。

たつおくんは施設で暮らしている。彼の兄弟も同じ施設で暮らしているらしいが詳しいことは知らない。彼の生い立ちについても私は何も知らない。それにしても、お下がりの靴でこんなにも喜べるものだろうか。人から物をもらって、こんな笑顔を見せる子どもが今の社会にどれだけいるだろうか。どうしたらこんな笑顔を与えられるのだろうかと頭に浮かんだが、その問いには意味がなかった。その笑顔は彼の心の奥から湧き出てくれるものであり、与えられるものではないからだ。

しかし、少年野球という場がなかったら、彼がこんな笑顔を見せることがあっただろうか。私にはそれはわからない。もしかしたら、彼はいろんな場所で笑顔を見せているかも知れない。一つだけはっきり言えることは、少年野球という場がなかったら私がその笑顔に接することがなかったということだ。

「いつかまたあんな嬉しそうな顔に出会えるかな」と考えていると、“お父さんコーチ”もまた楽しくなる。

(こんどうよしひこ・國學院大學人間開発学部初等教育学科教授)